

急性下肢動脈閉塞に対して、外科的血栓摘除術と経皮的血管形成術が有効であった一症例

¹社会医療法人社団カレスサッポロ北光記念病院、²社会医療法人社団カレスサッポロ北光記念病院、³社会医療法人社団カレスサッポロ北光記念病院

梁川 和也¹、米田 優一郎¹、谷原 孝典¹、中村 奈津子¹、中村 祐希¹、玉澤 充¹、山内 良司¹、野崎 洋一²、杉木 宏司³

【目的】急性下肢動脈閉塞に対して、外科的血栓摘除術と経皮的血管形成術が有効であった症例を経験したので報告する。【対象】77歳男性。4日前より右足の冷感、痺れ、痛みを訴え当院を受診。CTにて右浅大腿動脈に比較的、軟らかい血栓と思われる閉塞を確認したため、外科的血栓摘除術を施行した。【方法】右鼠径部切開しFogartyカテーテルを大腿動脈に挿入。血栓除去を行うも、繰り返し行ううちに狭窄が増強し末端部まで進まなくなってしまう。そのため、内科医にコンサルトし、Balloonにて狭窄部を拡張してからFogartyカテーテルを用い再度血栓除去を行うこととした。まずバックアップを得るためにカットダウンした右総大腿動脈にシースを挿入、それによりFogartyカテーテルを浅大腿動脈末端部まで進めることに成功した。【結果】0.014ワイヤーを挿入しIVUSにて病変部を確認後、Balloonで拡張し狭窄を解除。その後Fogartyカテーテルで血栓を除去し、末梢への血流を改善することが出来た。【結語】当院は循環器に特化した病院であり、日頃より外科と内科のコミュニケーションが取られている。また医師とコメディカルの意見交換も行われている。今回経験した症例においても、外科と内科の連携が密にとれたことで、トラブルに対処しスムーズに治療を完遂出来た。